

学位授与番号：乙 3202 号

氏 名：山川 英晃

学位の種類：博士（医学）

学位授与日付：平成 29 年 11 月 22 日

学位論文名：

Clinical Features of Idiopathic Interstitial Pneumonia with Systemic Sclerosis-related Autoantibody in Comparison with Interstitial Pneumonia with Systemic Sclerosis.

（強皮症関連自己抗体陽性の間質性肺炎における強皮症確定診断群および非確定診断群の臨床学的特徴の比較検討）

学位論文審査委員長：教授 黒坂大太郎

学位論文審査委員：教授 斎藤三郎 教授 尾尻博也

論文要旨

論文提出者名	山川 英晃 指導教授名 桑野 和善
<p>Clinical Features of Idiopathic Interstitial Pneumonia with Systemic Sclerosis-related Autoantibody in Comparison with Interstitial Pneumonia with Systemic Sclerosis (強皮症関連自己抗体陽性の間質性肺炎における強皮症確定診断群および非確定診断群の臨床学的特徴の比較検討) Hideaki Yamakawa, Eri Hagiwara, Hideya Kitamura, Yumie Yamanaka, Satoshi Ikeda, Akimasa Sekine, Tomohisa Baba, Shinichiro Iso, Koji Okudela, Tae Iwasawa, Tamiko Takemura, Kazuyoshi Kuwano, Takashi Ogura PLoS One. 2016;11:e0161908 (1-15) .</p> <p>【背景】膠原病はしばしば間質性肺炎を合併するため、間質性肺炎の診断に際し膠原病を基礎疾患に持っていないかの評価は極めて重要である。しかし、膠原病の診断基準を満たさないものの膠原病でみられる身体所見や自己抗体が陽性な患者、言い換えると不全型の膠原病患者が多く存在する。間質性肺炎を有するこの患者群が膠原病確定診断群と比較し、背景や予後が不良とする報告や変わらないといった報告があり、各検討で結果が一致しない。そのため膠原病を一まとめにしての検討ではなく、膠原病ごとに絞っての検討が必要と考えられる。</p> <p>【目的】間質性肺炎を有する強皮症（SSc）関連自己抗体陽性例において、SSc の確定診断群（SSc-ILD）および非確定診断群（ScAb-ILD）についての比較検討を行った。</p> <p>【方法】1997 年 3 月から 2015 年 7 月に当院で診断した SSc-ILD 群 40 例と ScAb-ILD 群 32 例の臨床学的背景、検査所見、画像所見、病理所見、予後の違いを後方視的に比較検討した。</p> <p>【結果】SSc-ILD 群で臨床背景では女性、非喫煙者が ScAb-ILD 群と比較し有意に多かった。一方、ScAb-ILD 群では約半数が男性、喫煙者であった。画像所見では SSc-ILD 群の多くが非特異的間質性肺炎（NSIP）パターンでさらに cyst を認める例が有意に多かった。ScAb-ILD 群では honeycombing を認める割合が有意に多かった。病理所見では、SSc-ILD 群で肺血管病変を有意に合併している頻度が高かった。予後は、SSc-ILD 群に比べ ScAb-ILD 群では有意に不良であった。</p> <p>【結論】間質性肺炎を有する SSc 関連自己抗体陽性で SSc の診断基準を満たさない群と SSc 確定診断群と比較し、臨床学的背景・画像所見・病理所見・予後と様々な点において相違が見られた。そのため ScAb-ILD は SSc の確定診断群とは違う疾患群とみなすべきと考えられた。さらに ScAb-ILD 群のうちには予後不良な群が存在し、特発性肺線維症として早期治療介入が必要になる可能性を臨床医は認識すべきと考えられる。</p>	

学位論文審査結果の要旨

山川 英晃氏の学位請求論文は、主論文 1 編からなり、論文のタイトルは「Clinical Features of Idiopathic Interstitial Pneumonia with Systemic Sclerosis-Related Autoantibody in Comparison with Interstitial Pneumonia with Systemic Sclerosis」で 2016 年に PLOS ONE に発表された。Thesis のタイトルは「強皮症関連自己抗体陽性の間質性肺炎における強皮症確定診断群および非確定診断群の臨床・画像・病理学的比較検討」ある。

この論文は、強皮症関連自己抗体陽性の間質性肺炎において、強皮症確定診断群 40 例と非確定診断群 32 例、両群間における画像所見、病理所見、予後の違いを比較検討している。結果は、画像診断においては確定診断群では、非特異的間質性肺炎パターンが多く、非確定診断群では **honeycombing** が多かった。病理所見では確定診断群で肺血管病変を合併している頻度が高かった。予後は非確定診断群が悪かった。

平成 29 年 11 月 22 日に斎藤三郎、尾尻博也両審査委員で出席のもと公開学位審査を開催した。山川氏による研究概要の発表に続いて口頭審査を実施した。質疑は以下の点を中心になされた。

1. 非確定診断群においてシェーグレン症候群などの他の膠原病が含まれている可能性について
2. 病理所見の解釈
3. 画像所見の解釈
4. 非確定診断群の予後が悪いことについて

口頭審査後に、斎藤、尾尻両教授と慎重に審議した。本論文は、強皮症関連自己抗体陽性の非確定診断群は確定診断群とは違う疾患群であることを明らかにしている。さらに、非確定診断群のうちには予後不良な診断群が存在し、特発性肺線維症として早期治療介入が必要になる場合があることについても言及している。このことは、呼吸器、膠原病領域の臨床において示唆に富むことであると判断できる。以上のことから、学位を授与するのに十分価値があると認めた。